

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話 (043) 485-1801

二種類の朝顔----- 勝田 倩弘 山陰の萩を訪ねて----- 松尾 美範
巨人・大鵬・白井城----- 陣谷 義直 佐原大祭----- 小川 泰二郎

「東寺 空海と仏像曼荼羅」展

村田 修造

3月26日から6月2日まで東京国立博物館で特別展「国宝東寺 空海と仏像曼荼羅」展が開かれていた。展示されている仏像は東寺講堂にある仏像立体曼荼羅21体のうち15体で、最大の見どころは象に乗った国宝帝釈天騎象像であろう。

東寺（教王護国寺）は平安時代に王城鎮護の官寺として創建され空海に与えられた真言宗の総本山である。東海道新幹線で京都に向かうと真っ先に五重塔が見えてくる馴染みのある寺だ。

曼荼羅は仏教の世界と教えを分かり易く示すために描かれた図像が一般的だが、東寺の立体曼荼羅はそれを仏像で表現することで視覚に訴える効果を持っている。一般的には大日如来が中尊だが、今回の展示では帝釈天騎象像が中

心に座っている。

この帝釈天は「仏女」の間では仏像界最高の「イケメン」として若い女性の参拝が絶えない。平安時代の作であるが1197年に運慶が修復したとの記録もあり、平安の優雅と鎌倉の雄渾を併せ持つ名品であることには変わりない。今回の展示では帝釈天を囲むように各4体の如来、菩薩、明王が囲み、両端に持国天（毘沙門天）と増長天が控えている。

そもそも空海とは誰か。

空海は774年頃香川県善通寺辺りで生まれ幼名を真魚まおと言ひ、その後空海、遍照金剛と名を変え、入定後86年目に弘法大師あまねの諡号しごうを朝廷から下された。遍くこの世を照らす「お大師さん」は、私たちに最も親しい身近な存在ではないだろう

か。

804年に在唐20年を義務付けられている留学僧るがくそうとして遣唐使船で唐に渡った。長安では恵果けいか和尚から密教の奥義を伝授され滞在わずか2年で帰国してしまう。そのため朝廷から帰京の許しが出ず4年間大宰府に留め置かれてしまう。入京が叶ったのは809年頃と言われている。

その後空海は817年に高野山金剛峰寺を建て、823年に東寺を賜って真言宗を確立した。835年62歳で高野山で入定し、今も奥の院で禅定されていると伝えられている。



国宝帝釈天騎象像

(編集委員)

二種類の朝顔

初夏ともなれば朝顔の種をいつ蒔こうかと気になる。

3年前、佐倉市民カレッジ一年生の時、小学校一年生と昔遊びをする機会があった。遊びの内容はよく覚えていないが、別れの時、朝顔の種をお礼にいただいた。名前・絵・コメント付き袋入りの洋風の朝顔の種である。その袋は今も手元にあり、毎年それを見て三色の種を蒔く。

今年も沢山芽生え、その苗は近隣・友人にも育てていただいている。皆で楽しんでいただいているものと思う。

毎年梅雨明けを待ちかねたようにその朝顔は咲き始める。母の命日とも近く、思い出す頃でもある。

私の小学校三年生の頃、母が、箆笥から半紙に包まれた押し花を出し見せてくれた。赤紫の大輪の朝顔であった。その鮮やかさに

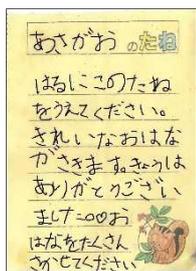
驚いた記憶が今も鮮明に残る。

母は小さいころ朝鮮にもいたという。その頃「父が咲かせた朝顔」とのことであった。父親の思い出の朝顔であろう。その母も今は、五十回忌も済んだ遠い人である。

退職後佐倉に帰り、その花に似た和風朝顔の花三色を育て19年、毎年咲かせている。生垣の中に、4本の支柱を立て、三角状に緑の糸を引き、朝顔を登らせる。毎朝、水遣りと一緒に糸に這わせ立ち上げ、姿を整える。これが、私の日課である。

今は四年生の女児童の来し方行く末を想いながら、在りし日の母を偲んで二種六色の朝顔を今朝も眺めている。朝顔は、今日も朝日を浴びてすがすがしく、まぶしい。

(六崎 勝田 倩弘)



山陰の萩を訪ねて

最近、山陰の萩を訪ねる機会を得た。

山陰は、文字通り曇りの日の多い、遠い地であった。ただ、静かで品の良さを感じた。毛利氏が陽光豊かな瀬戸内から江戸幕府により滅封され草深い道なき山陰萩に移される。毛利氏を封じ込めた形だ。そんな毛利氏は、文武に力を入れる。その結果が260年後、明治維新となって現れることとなる。

萩の街は、武家屋敷が保存されておき、高杉晋作、桂小五郎といった維新の英雄の生家も残っていた。夏みかんが名産で多くの家の庭からたわわに実った夏みかんが顔をのぞかせていた。幕末の英雄の幼少期を思い描きながらゆっくりと散歩してみよう。

吉田松陰の松下村塾を訪ねる。思いのほか小さい。こんな狭

い塾舎小屋で吉田松陰は、高杉晋作、桂小五郎、久坂玄瑞、伊藤博文といった門下生を育てていった。それも無報酬でだ。松陰27

歳のことである。松陰が教育した期間はたったの1年。この短い期間に、この粗末な教室から若い塾生が育ち、明治維新の原動力となる。

松陰は安政の大獄で江戸小伝馬町にて刑死する。処刑を覚悟した松陰が郷里の両親に宛てた別れの書簡の中で詠んだ句の碑があった。

「親思う　こころにまさる
親ごころ　きょうの音づれ
何ときくらん」

松陰の両親に先立つ不孝を詫びている気持ちが見えらる。享年30歳。日本の宝を失う。

(山王 松尾 美範)



松下村塾

巨人・大鵬・臼井城

私は北海道生まれ、佐倉に移り住んで30年、この二つが故郷である。北海道釧路に住み、小学校の頃は『巨人・大鵬・卵焼き』の時代であった。このフレーズは、昭和36年子供に人気があるものとして経企庁官僚の堺屋太一さんが発したものだ。巨人では、佐倉のスーパースター長嶋茂雄が大活躍していた。当時の北海道は巨人ファンが多かった。なぜなら、毎年札幌・円山球場で行われる巨人戦が唯一のプロ野球であったからだ。

小学校時代は、地元弟子屈町出身の大鵬幸喜が大活躍、大人も子供も大熱狂した。その大鵬は、昭和15年樺太生まれ、昭和20年8月20日、5歳でソビエト侵攻を受けた樺太から大混乱の中、ケール敷設船「小笠原丸」で命からがら稚内に引き上げてきた。その後、その船は、約700名の引き

上げ者に乗せ小樽港を目指し航行中、22日未明増毛沖で船籍不明の潜水艦により撃沈され、多くの犠牲者を出した。稚内で途中下船しなければ大横綱大鵬は誕生していない。また、遺体は海流に流され、稚内声問海岸に漂着したとのこと、これ等を最近知った。

さて、佐倉だが、自宅と会社との往復で地元の歴史に関心がなかった。それが、退職し自由な時間が出来ると見るものの景色が変わった。佐倉市民カレッジ2年生の昨年は、13名の仲間と「佐倉のまちづくり」で、最近発刊された小説をネタとして、「臼井城」での越後・上杉謙信軍との合戦の模様を紙芝居にした『謙信に勝った臼井城』を製作した。今は、卵焼きに代わり、中世の名城臼井城の歴史に熱中している。

(王子台 陣谷 義直)

佐原大祭

7月13日に佐倉市民カレッジ同級生の仲間と共に、佐原の夏祭りを見学しました。

JR成田から佐原迄、単線の鉄道で、森の中の細い径や広々とした田んぼの中を行く列車も快いものでした。

江戸の古くから、利根川の舟運で栄えた北総の小江戸「佐原」。江戸優りと呼ばれる華々しい独自の文化を開花させ、その文化の集大成である「佐原の大祭」と「佐原囃子」は国指定重要無形民俗文化財に指定され、ユネスコ無形文化遺産にも登録されています。

佐原駅の改札を出ると、ピーヒャラドンドンと軽快なお囃子と、半被を着た佐原美人の軽快な踊りが迎えてくれました。たちまち夏祭り気分に乗せられました。駅から小野川に出て川沿いに、山車が集まることになる

山村会館前交差点に向かいます。江戸時代の雰囲気満載の街並みの間を歩くのも乙なモノ。忠敬橋にくると、山車の大天井に載った大きな鯉が見えました。藁で精巧に作られた見事なものでした。これは5年に一度作り変えられるとのこと。次いで菅原道真の大きな像を載せた山車。この顔は、本物の人間のようなりアルな美しいものでした。こうして道を歩きながら、10台の山車を見学。何れも見事な像。山村会館前交差点で、「のの字廻し」を見ることができました。山車の右前輪を中心に、のの字を描く方向(11時計回り)に、屈強な男性2人がそれぞれ前輪2つの上の梁に肩を入れ、大勢の男が横・後ろから押し、廻します。その力強いこと。終わったら拍手が沸き起こりました。

この日は運よく、雨に合わずに帰ることができました。

(八幡台 小川 泰二郎)

9月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「趣味」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字程度（14字×47行）です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL: 043-485-1801 FAX: 043-485-1803

〒285-0025 佐倉市鐺木町 198-3

E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp

URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集を行っています。

やぐら道

桜の花が咲く頃は、筍や山菜等、掘りたて採りたては香り良く、見て春を感じ、食欲も湧き、身も心も元気になります。

初夏は、新緑の美しさに負けない初鰹、新茶や蚕豆^{そらまめ}、茗荷^{みょうが}等々。

真夏は蒸し暑さから少しでも涼しさを求める。西瓜やメロン、初秋の先取りで新米や梨、高原野菜等が目にとまります。

秋には豊富な果実や魚類、秋野菜も増え、暑さで疲れた身体を元気に回復させる食材が多くなると思います。

冬は身体を温める鍋料理、特に好みは「あんこう鍋」、冬野菜をたっぷり食べられ、和みます。

季節により旬の食材は様々、食べ方も色々、見て美しく美味しさを感じ、身も心も満たしてくれると思います。

(中莖^{なかつくき} 久美子)

あとがき

ここ数年、『音読』が注目されています。文章を声に出して読むことで様々な効果があるというのです。

その効果とは、「脳を活性化する」「内容が記憶に残りやすい」「感情が豊かになる」そして「喉を鍛える」等々。どれも私たちの年代にとってうれしい効果です。

2025年65歳以上の5人に1人が認知症になると言われています。

す。また現在日本人の死亡原因の第三位は肺炎。そう、『音読』は、「認知症」と喉の筋肉が衰えることから起こる「誤嚥性肺炎」の両方を予防することができるのです。

今年度から編集委員に仲間入りしました。月2回の編集会議では熱い意見が飛び交います。是非、『なかま』も音読していただきたいと思えます。

(内田 弓子)